

古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館

2014.1

第57号

特命電報・石川理紀之助、 北海道の馬櫓を調査せよ！

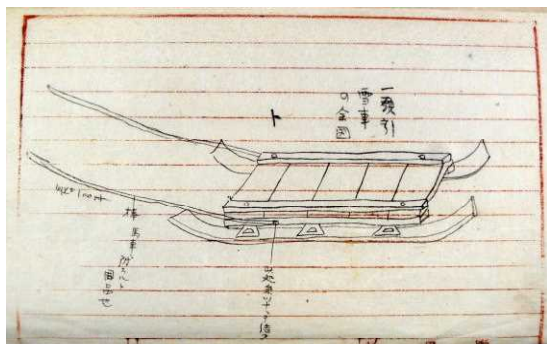
秋田県内では昭和三十年代まで、馬櫓が冬場の重要な交通運輸手段として使われ、市街地でも農村部でも身近に見られたそうです。バス運休の際には馬櫓が代行して乗客を運び、農家では米俵や炭俵、堆肥ほかの運搬に使われました。

さて、秋田の冬に欠かせなかった馬櫓ですが、江戸時代からのものではありません。今回は、秋田県に馬櫓が導入された経緯を紹介しましょう。資料は、明治十四年度「会計課司計掛事務簿」命令書換用之部三番（九三〇一〇三一〇四六六）の中にありました。明治十四年（一八八一）、札幌で開拓使と秋田・新潟・石川・福井四県の連合米爾共進会が開催され、秋田県勸業課では石川理紀之助を委員として派遣しました。後に秋田の老農として知られた理紀之助も、当時まだ三七歳、勸業課農業掛の一官吏でした。共進会開催中の十月三日、理紀之助のもとに勸業課から一本の電報が届きました。「北海道ニ而使用セル馬ニテ挽ク雪車実物見分ノ上其便否精ク取調アレ委細ハ郵便」の文面です。十五日の帰県を前に急遽、北海道の馬櫓を調査す

あけましておめでとうございます。本年も公文書館と古文書倶楽部をよろしくお願い申し上げます。さて、新年第1号では二〇一四年の干支にちなんで、馬に関する話題をお届けします。

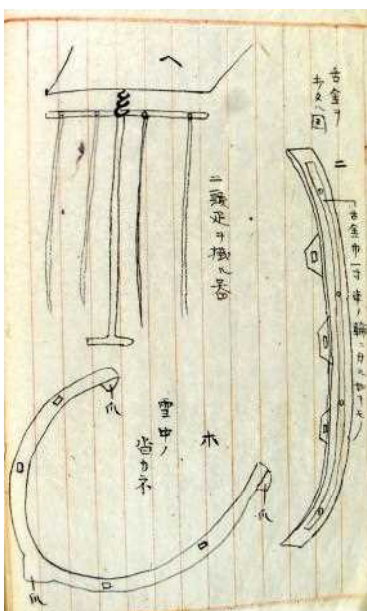
の特命が下りました。委細を記した郵便は「近年開拓使で普及した馬櫓が非常に便利なものと聞き雪国の秋田県でも使用を奨励したく、現物を詳細に調査して模型か図面を作成し、製造費用も調べて欲しい」との内容でした。北海道と秋田県の積雪量の違いが馬櫓使用にどのように関係するかの調査も追加されました。秋田県が馬櫓導入に本腰を入れた様子が分かります。

右の郵便は十五日まで届きませんでした。理紀之助は電報をもとに短期間で札幌の馬櫓を調査し、帰県後の十一月二十五日に調査復命書を起草しました。写真は復命書に添付された馬櫓の図面で、理紀之助自身の筆で描かれました。



全体図を見ると、昭和三十年代に県内各地で使用されていた馬櫓とほぼ同じ形態であることが分かります。理紀之助は、雪道で馬の滑り止めに秋田の「かんじき」のような爪付きの蹄鉄（沓力ネ）を使用すること、台木（櫓板）に人力車の輪のように鉄板を

張り付けて摩擦を防ぐこと（秋田の下駄力ネと同じ原理）、一頭引き馬櫓で米四斗俵一〇俵（約〇・六トン）を運べることを報告しています。県令石田英吉の下命もあり、勸業課では報告書と図面を資料にして秋田の業者に馬櫓を製造させ、引き馬に勸業場の農耕馬を使い試験運用を行いました。



さて、理紀之助が調査した北海道の馬櫓のルーツは？ 開拓使は先進技術を主にアメリカから導入しましたが、馬車と馬櫓はロシアを参考にしています。明治十一年、黒田清隆長官は開拓使工業局でロシア人職工三名を雇い、日本人職工を付けて本格的に馬櫓の製造を始めました。理紀之助が札幌に行った当時は、既に開拓使陸運改良係で馬櫓を定期運行させていました。ロシア型馬櫓の構造上の特徴は、台木の先端がスキー板のように反っていること、台木の裏側に鉄板を張って滑りを良くすると共に摩擦を防いでいることです。かつて冬場に秋田県内を走っていた馬櫓は、意外やロシア型だったことが当時の公文書から分かります。【柴田知彰】※参考文献『札幌事始』（札幌市教育委員会）文化資料室編、北海道新聞社、一九七九年）

古文書こぼればなし

長野馬場土手並木の 植え替え事情

秋田駅から西へ、旭川の岸辺まで真っ直ぐ千

戸時代は、久保田藩の重臣たちが軒を連ねてい

ました。東側、秋田駅辺りは沼地で「御城下絵

図」(県C―五九九)には「沼

と書かれ、安政二年(一八五

五)には長野沼を掘り替えた

ことが記録されており、明治

までは沼が存在したよう

です。

江戸時代は、広小路の東端

に多賀谷家の屋敷があつて、

その西隣に佐竹北家の屋敷が

あり、両家の間が「馬見所」

を兼ねた馬場になつていま

した。馬場は、長さ約一九〇間

(約三三四メートル)で中心

に土手があつて馬が廻走でき

るようになつていました。藩

主の馬一覽や馬術の稽古など

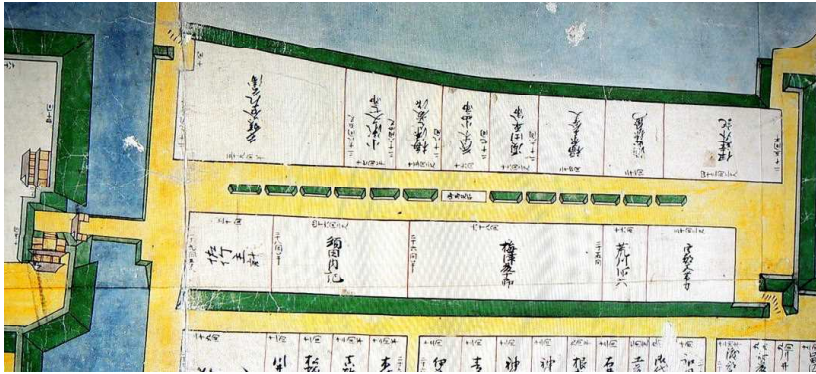
が盛んに行われていました。

この馬場は長野馬場と呼ば

れ、土手には桜並木があり、

「桜の馬場」とも呼ばれ桜の

名所となつていたようです。



寛保二年の「御城下絵図」(県C-165)

秋田藩士人見蕉雨の著した『和説鄂』の中の秋田藩雜記に「長野馬場土手ニ先年並木の桜これ有り、元禄五申のとし(一六九二)、右桜を取りのけ松をうえし」とあり、この年に桜を松に植え替えたといひます。この馬場が造成された時期ははっきりしません。公文書館所蔵の寛文(一六六一―七三)の絵図には、馬場が描かれていませんが、寛保二年(一七四二)の絵図には描かれており、これが最も古いようです。馬場の桜が松に替えられた経緯について、高垣猶存(兵右衛門高枝)の『昔雜談日記』(羽

城昔物語)に次のようにありま

す。三代藩主佐竹義処と正洞院

聴齋(五世燈外正明)が、つれ

づれの会話中に馬場の話になり

聴齋が義処に「馬場は松を植え

た方が常に湿気を持つので、一

段と効果的だ。桜は全部正洞院

の境内に植えたいので拝領した

い」と申し上げました。義処は、

それはいい考えだと言つたかど

うか分かりませんが、早速半右

衛門(家老梅津忠宴)を呼んで

右の旨を申し付けました。

半右衛門は、翌日役人に「御

馬場の桜を残り無く薪に伐り正

洞院へ馬にて運び、その跡へ松

を植えなさい」と申し付けまし

た。役人は言いつけ通り残らず

薪にし正洞院へ運びました。聴

齋は大変立腹し、義処の御前へ

出て御直に「私は薪でなく寺内

に植えたいので根付きのまま拝領したかつた」と申し上げました。義処も怒って半右衛門を呼び、なぜ言い付け通りしなかつたかと言いますと、半右衛門は「私が聞き違えて薪にしてしまった。甚だ不調法なことをして申し訳ありません」と謝りました。

御前を下がつた半右衛門は、次の間へ来て言うには「根付きのまま遣わすようにと御意を承りました。数百本の太根を根のまま遣わすのは莫大な人費が掛かり簡単に出来ることではない、私が一人承り違いにして置けばそれで済むことである、それ故右のように申し付けた」とのことです。藩政を司る家老の立場での処理の仕方でありましょう。

正洞院とは、久保田初代藩主佐竹義宣の正室で那須資胤の娘正洞院殿明室珠光大姉の戒名からとり、寺号を廣澤山正洞院と名付け菩提寺としたものです。初め江戸上野に建立しましたが、秋田へ転封後慶長一〇年(一六〇五)手形大沢に建立されました。江戸の正洞院は現在も東京の同地に現存しています。明治に秋田正洞院は廃寺となり、天徳寺に合併されています。正洞院跡の境内には、正洞院の墓碑が鞘堂に納まつていて丁重に供養されています。境内の山手には、平田篤胤の国指定史跡の墓が建てられています。

馬場を取り巻くように、高禄家臣たちの屋敷がありました。明治以降秋田駅が建ち、歩兵第一七連隊の兵営が営まれ、戦後兵営が破却されたあとに学校などが建てられ数々の変遷を経て現在に至っています。

【嵯峨稔雄】